

外国語科における小中連携

—自己表現活動に焦点をあてて—

M11EP004

梶原ナツミ

1. はじめに

平成 24 年度から施行された中学校学習指導要領では、小学校における外国語活動と中学校における外国語科との円滑な接続を考慮することが記述されている。外国語科における小中連携が、新たな課題として注目されている。そこで筆者は、昨年度「外国語活動における小中連携—教材研究に焦点をあてて—」というテーマで、小学校での実習を通じて、外国語活動や児童の実態を理解し、中学校の外国語科につなげるための授業を行い、一定の成果を収めることができた。さらに今年度は、実習の現場を中学校に移し、小学校での成果を生かして、外国語活動を踏まえた授業実践をしたいと考えた。本報告書は、2 年目の成果を報告するものである。

2. 研究の目的

本研究では、小・中学校間での外国語科におけるスキル面や学習形態等のギャップによるつまづきを防ぐための手立ての一つとして、自己表現活動に焦点をあてた。小学校で慣れ親しんだ聞くこと、話すことなどの活動内容や英語での表現を発展させて、「自分の考えや気持ちを伝える」ことに重点を置く。効果的な小中連携を実現させるために、自己表現活動の授業実践を試み、その効果を分析する。

3. 研究の方法

【実習校】 山梨県 A 市立 B 中学校

【実施期間】 6 月～1 月

(1) 観察実習：毎週 8 時間

教材研究と生徒の実態把握

(2) 授業実践：9 月 19 日、20 日、24 日、
25 日の計 4 時間

・対象生徒 1 年生 2 クラス（各 38 名）

・単元名 PROGRAM5-1

「国際フードフェスティバル」

本報告では、授業実践の際の生徒の感想や録画ビデオを分析して、実践した自己表現活動の有効性を検証していく。

4. 研究の内容

(1) 小中連携における課題

① 学習指導要領より

平成 23 年度から実施されている小学校における外国語活動は、教科としてではなく、領域の枠内に設定されており、スキル面での習得の程度を求めている。外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深めること、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ること、コミュニケーション能力の素地を養うことなどをねらっている。文字は導入せず、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ活動に力点が置かれる。

それに対して、中学校 1 年生から学ぶ教科としての外国語では、聞く、話す、読む、書くという 4 技能であるスキル面の習得を求められるため、小学校とのギャップを感じる生徒も少なくない。また、学習指導要領の改訂による授業時数の増加に伴って、語彙数や教科書の内容量も多くなっており、生徒の感じるギャップが大きいことも予想される。

② ベネッセの調査より

ベネッセ（2009）の中学校教員 3643 名を対象として行われた「第 1 回中学校英語に関

する基本調査[教員調査]において、中学校教員が英語に対する生徒のスキル面や情意面に課題があると感じていることが分かる。

スキル面においては、単語（発音・綴り・意味）を覚えるのが苦手なこと（68.8%）、英語の文や文章を書くことが苦手なこと（58.3%）、英語の文字や文章を読めない（文字から音にうまく変換できない）こと（50.2%）が上位を占めている。

情意面においては、英語に限らず学習習慣がついていないこと（68.0%）、英語に限らず学習自体への意欲が低いこと（61.0%）に課題があると懸念している。

また、ベネッセ（2012）が4年後、中学1年生及びその母親 2688 組へのインターネットで行った「小・中学校の英語教育に関する調査」によると、生徒が中学校英語の授業への意識において、授業中に英語を話す時間が少ないこと（25.4%）の不満をあげている。このことから、小学校での活動を生かして、中学校でも英語を話す機会を多く設けることも課題であることが考えられる。

③ 観察実習より

観察実習を通して、小学校での外国語活動によって、すでに小学校段階で生徒にスキルの差や意欲の差などが生じているように感じた。これまで外国語は中学校でのスタートだったが、平成 23 年度から実施されている小学校の外国語活動により、状況が変わってきたことがうかがえる。

スキル面について、生徒は外国語活動の経験によって比較的発音はよく、音声面での能力はたけている。一方、小学校の活動では、必要性がなかった文字を音と一致させることに困難を感じている様子が見られた。授業観察では、生徒が文字を見て読むことが苦手であること、単語テストなどを通じてアルファベットが書けないなど、文字に苦手意識を持っていることが分かった。中学校では、小学

校で先行していた聞く、話すスキルと違った、読む、書くスキルも要求される。中学当初からスキル面は高いものを求められているので、生徒が多くのスキルを学んでいくことに困難を感じていることが考えられる。このことから、音声面のスキルを生かして、読むこと、書くことにつなげていくことが課題としてあげられる。

情意面では、小学校ではゲームが楽しかったが、中学校にはそうした活動がないなど、小学校の外国語活動とのギャップを感じている生徒もいた。両者の連続性を考慮して、ゲーム的要素を取り入れ、小学校での活動を生かした授業を考えることも課題としてあげられる。また、小学校では外国語活動において、電子黒板などのデジタル教材を積極的に使用している。中学校の外国語科において ICT を積極的に活用することも有効であろう。

	生徒の実態	対応策
効果	<ul style="list-style-type: none"> ・発音が良い ・聞き取りができる ・スピーチが好き 	<ul style="list-style-type: none"> →話す機会の保障 ・スピーキングの工夫 ・ALT の活用
課題	<ul style="list-style-type: none"> <スキル面> ・文字が苦手 	<ul style="list-style-type: none"> →ライティングの工夫 →グループ学習
	<ul style="list-style-type: none"> <情意面> ・学習意欲の低下 	<ul style="list-style-type: none"> →ゲーム的要素の取り入れ →ICT の活用

図 1：小学校外国語活動による生徒の実態と対応策（筆者が観察したものをまとめたものである）

(2) 自己表現活動の有効性

上記の課題に対応するために、本研究では自己表現活動に焦点をあてることとした。

自己表現活動とは、自分の持ち物など実物を扱ったり、学習した表現などを自分に関連させて表現したりする活動である。例えば、“I can play **baseball**.” という文がある。英語の授業において、基礎・基本となる文法事項を習得するために、与えた情報をパターンで練習し、生徒ができないこともできることとして表現する場合がある。これは形式的な

偽の情報であり、扱う情報が真実とは異なる可能性がある。自分の表現したいことではない場合があるので、表現において感情がこもっていなかったり、意欲の低下を招いたりすることもあるだろう。一方、自己表現活動では、“baseball”の単語を、自分が本当にできること（真の情報）を生徒自身が選び、自分のことに置き換えて自由に表現することができる。また、みんなが同じ表現ではなく、その子らしさが見えるものでもある。

田中（2006）は、自己表現活動の条件として、以下の4点を示している。

- ① 自分の考えや思いがある
- ② 目標達成の手段としての言語活動がある
- ③ 他者との関わりがある
- ④ 自己との関わりがある

また、そのような活動になるためには、以下の4点到意することを述べている。

- ① 必然性を高める

場面設定を明らかにし、状況をイメージさせることで、コミュニケーションの意義ができ、意味のある活動となる。

- ② 具体性を高める

実物や真の情報を扱うと、リアリティが増し、実際の場面での活用が期待できる。

- ③ 自己関連性を高める

英語を使って、「伝えたい」「聞きたい」意欲を高めることが期待できる。

- ④ 自由度を高める

自由度が高ければ高いほど、生徒の主体性を重視することができる。

自己表現活動では、上記のような方法をとることによって、意欲向上の効果が見込めるうえに、限られたスキルでも有効な活動である。個々の生徒のスキルのばらつきに応じて、達成感や成就感を得られることが期待できる。また実施する際に、スキル面で不安な生徒が見られる場合には、グループ学習を積極的に導入し、学び合い・助け合い学習の場を設定することも有効である。ベネッセ（2012）に

よると、英語の学習動機について、生徒は英語ができるようになるのがうれしい（70.9%）など、内発的な動機づけの要因も高かった。達成感や成就感を得られる活動を仕組むことで、学習意欲の低下を防ぎ、さらに伸ばすことも期待できるだろう。

5. 授業実践

(1) 1時間目

【日時】9月24日(月), 2校時(9:45~10:30)

【目標】

- ・“This (That) is~.”の形と意味「これは～です。」，“Is this (that) ~?”の形と意味「これは～ですか。」を理解することができる。
- ・“Is this (that) ~?”の形を使って、自分の身の回りのものをたずねたり答えたりすることができる。
- ・失敗を恐れず、積極的に対話することができる。

【授業の主な流れ】

挨拶 (3分)	Good morning, everyone.
導入 (5分)	<ul style="list-style-type: none"> ● パワーポイントでWhat's <u>this</u>?を用いたクイズ ・数人の生徒とのやりとり ● : Is <u>this</u> your ~? □ : Yes, it is. / No, it isn't. ・thisをthatに変え、同様にクイズや数人の生徒とのやりとり
理解と練習 (16分)	<ul style="list-style-type: none"> □ 文法事項の確認・理解 □ 穴埋め練習問題 □ 音読練習
リスニング (4分)	<ul style="list-style-type: none"> □ P.50の「聞いてみよう」 A : Is this (that) your ~? B : Yes, it is. / No, it isn't.
自己表現活動 (15分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ Can you find the owner? ● パワーポイントを用いて、モデルを示し、ルールを説明 □ 対話練習 □ 1回目のやりとり A : Is this your textbook? B : Yes, it is. / No, it isn't.

	<input type="checkbox"/> 2 回目のやりとり A : Is that your dictionary? B : Yes, it is. / No, it isn't. <input type="checkbox"/> 発表
まとめと挨拶 (2分)	<input type="checkbox"/> 学習感想の記入 <input type="checkbox"/> 本時の学習内容の振り返り ● 次時の連絡 Goodbye, everyone.

< ●は教師の活動, □は生徒の活動 >

このセクションでは、生徒は初めて“this”や“that”などの代名詞を学習する。また、be 動詞の“is”が初出となり、今まで登場してきた“am”と“are”に加え、これで be 動詞が全て登場することになる。

導入では、小学校の外国語活動に用いられた英語ノートやデジタル教材をヒントに、パワーポイント（教師の私物の文房具やかばんの画像）を用いながら、クイズ形式で“What’s this?”の表現を導入した。次に、クイズで扱ったものを中心に、教師は生徒の実際の持ち物を指しながら、数人の生徒に“Is this your ~?”とたずね、生徒に“Yes./No.”で答えさせ、教師が“Yes, it is./No, it isn’t.”と言ってフィードバックした。同様に“What’s that?”を導入し、教師は数人の生徒と“Is that your ~?” “Yes./No.” “Yes, it is./No, it isn’t.”というやりとりをした。

文法事項では、既習内容の be 動詞と比較できるように、色画用紙で色分けしたものをを用いて、視覚的に分かりやすいようにした。

自己表現活動で扱う表現を導入から活動まで用いて、多くのインプットをし、活動につなげた。

【自己表現活動】

① 内容

場面設定は「教科書（辞書）の持ち主を探すこと」として、4 人のグループ内で教科書（辞書）の所有者について確認する。一定時間内に、教科書（辞書）の当てた数をグルー

プ間で競い、ゲーム的要素を取り入れる。必然性を高めるために、誰のものか分からないように名前を隠し、具体性を高めるために、生徒自身の教科書や辞書(実物)を使用した。

② 方法

- 1) 机を班の態勢にし、それぞれの教科書を机の中央に4冊並べる。
- 2) 1人の生徒が1冊の教科書を選び、隣の人に教科書の名前を見せながら“Is this your textbook?”とたずねる。
- 3) 答える人は、当たっていたら“Yes, it is.”と言い、教科書を自分のところに戻す。間違っていたら“No, it isn’t.”と答え、教科書を机の中央に戻し、混ぜる。
- 4) 残りの2人は、2人のやりとりを見ているといった流れである。
- 5) 2回目は辞書に変えて“Is that your dictionary?”という表現で、同様にやりとりをする。机から少し離れる指示をした。

(2) 2 時間目

【日時】9月25日(火), 4校時(11:50~12:40)

【目標】

- ・“This is~.”の文を使って、山梨のおすすを紹介する文を書くことができる。
- ・紹介文を正確に発表することができる。
- ・間違いを恐れずに、みんなに分かるように伝えようと努力する。

【授業の主な流れ】

挨拶 (3分)	Good morning, everyone.
本文の導入 (3分)	● パワーポイントで本文と It’s ~. の導入
自己表現活動 導入 (4分)	● モデルの提示 □ テーマの把握
ライティング (28分)	● 紹介文の書き方の説明 □ グループでテーマを決定 □ グループごとに英作文
スピーキング (10分)	● 発表における工夫の提示 □ 発表練習 □ 各グループ(8グループ)の発表

まとめと挨拶 (2分)	<input type="checkbox"/> 学習感想の記入 <input type="checkbox"/> 本時の学習内容の振り返り <input checked="" type="checkbox"/> 次時の連絡 Goodbye, everyone.
----------------	---

<●は教師の活動，□は生徒の活動>

この授業では，導入においてパワーポイントを用いながら，オーラル・イントロダクションで本文や今回の活動で用いる“**It’s~.**”(本文の中で出てくる)の表現を導入した。また，活動のモデル文(図2)は，教科書の本文を参考にして，教師がALTにタイカレーを紹介する形で導入した。そして，自己表現活動へと結び付けていく。

☆Let's recommend ○○ for ☆

～先生に山梨のおすすめを紹介しよう！～

No. Name

▶モデル文

We recommend Thai curry for .

This is Thai curry. (これはタイカレーです。)

It's hot. (辛い です。)

It's delicious. (おいしい です。)

It has herbs and coconut milk. (ハーブ, ココナッツミルクが入っています。)

We like (love) it. (私たちはそれを好き[大好き]です。)

That's all.

Thank you.

▶メモ

▶先生へのおすすめ紹介について，上手くいったこと，改善したいこと，発見したこと，思ったことなどを書いてください。また，次回に発表があったら生かしたいことも書いてください。

図2：ワークシート

【自己表現活動】

① 内容

実習校では，ALTが9月に変わり，新しいALTは山梨に在住して間もないので，山梨のおすすめを紹介することは，非常に意義のあることだと考える。そこで，「ALTに山梨のおすすめ(自分の住んでいる県の食べ物や観光地など)を紹介する」という活動にした。テーマは，事前に生徒が考えた山梨県のおすすめから，教師がパワーポイントとピクチャーカードを用意した。そのテーマの中から4人グループごとに選択させ，「自分の考えや気持ちを伝えたい」という生徒の意欲を駆り立てる。最終的にALTに紹介するという状況をつくり，生徒が成就感や達成感を得ることができるような活動を仕組む。また，活動に必ず全員参加できるように，ライティングやスピーキングの構成を考えた。

② ライティングにおける工夫

1) 各グループに配布したプリント(図3)

*のところに，自分で考えた紹介文を書きこむようにする。最低でも一人一文は書くように設定したが，班で協力して助け合いながら文章を書くように指示をした。

☆Speech manuscript☆

Group: 全員

We recommend _____

_____ for _____

* _____

* _____

* _____

* _____

* _____

* _____

That's all. 個人

Thank you. 全員

図3：各グループに配布したスピーチ原稿

2) 表現の設定

“This is ~.” “It’s~.” “It has ~.” など「~」の部分を変えて書くことができるように表現を設定して、書きやすくした。“It has~.”は未習の表現であるが、多くのテーマで用いることができるので導入した。

3) ヒントカードの提示 (図 4)

グループで用いることが予想される単語(地名や場所、名詞や形容詞など)は、ヒントカードとして提示した。

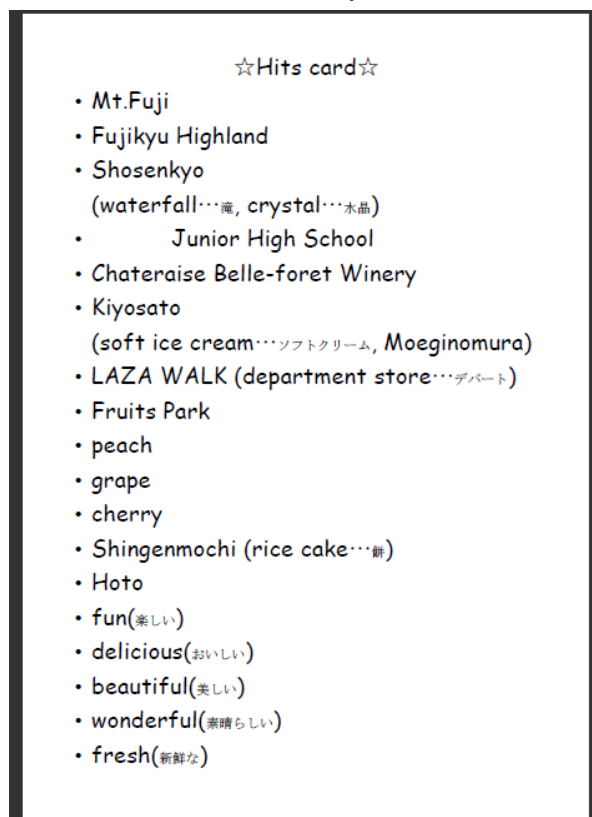


図 4：ヒントカード

4) 辞書の活用

ピクチャーカードを各グループに配布し、テーマについてのイメージを持たせ、表現したいことを積極的に調べさせた。

③ スピーキングにおける工夫

1) 発表するときの工夫の提示

“eye contact” “good voice” “nice smile” “only English” を提示したり、ピクチャーカードを提示しながら発表させたりすること

で、相手意識を持たせ、よりよいコミュニケーション活動を目指した。

2) 話す機会の保障

一人一人が最低でも 4 文 (グループ全員で 3 文, 個人で最低 1 文) 話す機会を設けた。

3) ALT の活用

各グループの発表後に、毎回 ALT に簡単なコメントを述べてもらい、伝えて終わる活動ではなく、双方向のコミュニケーション活動とした。

6. 授業実践の考察

生徒が授業の中で記入した感想をもとに、今回の自己表現活動が、生徒にとって成就感や達成感をもたらすものであったかを検証していく。

(1) ゲーム的要素の有効性

1 時間目に行った「持ち主を探す」という、グループ間で教科書や辞書を当てる数を競う活動では、「教科書や辞書を誰のものか当てるのが 4 つ当たった。すごいと思った。」「今日、ミニゲームみたいなものをやり、けっこう楽しかったです。またこういうのをやりたいです。」「新しいことをやったので面白かったです。ゲームも楽しかったので、すらすら言えるようにしたいです。」といった記述があった。

これらの記述から、ゲーム的要素を取り入れることで、学習への意欲を駆り立てることができたことが読み取れ、ゲーム的要素の有効性を実感することができた。

(2) ICT の活用の効果

生徒たちの様子や「テレビを使いながらの授業は楽しかった。」「ゲームなどで電子黒板なども使って良かった。」という記述などから、小学校の外国語活動で活用されていた ICT を用いることで、授業への参加意欲が向上したと考えられる。

(3) ALT の活用の効果

生徒たちは、ALT とのコミュニケーションにおいて、肯定的な評価をしていた。「上手くいったことは、みんながしっかり自分の言葉を分担できたことと、C 先生にぶどうのおいしさなどを上手く英語で伝えられたことです。」「決めるのには時間がかかったが、意外に英語を上手く使えて C 先生に伝えられた。」といった記述がみられた。これらのことから、ネイティブ・スピーカーである ALT を活用したことで、生徒が「英語で」伝えることの必然性を持って、成就感や達成感、自信につながったことがうかがえた。

さらに、「C 先生に紹介して、表現が面白く、またそういう表現が見たいので、もっといい紹介をしたいと思った。」という記述から、ALT からもらったコメントそのものや、コメントの際の表情やあいづち、ジェスチャーなどを用いた表現に刺激を受けて、生徒の伝えたいという意欲の向上につながることでもできた。

一方、スキル面の向上につながる活動とするためには、いくつかの課題も残った。「内容がもう少し良ければ、もっと良かったと思う。」や「今度はもう少し長く難しい文を作りたいです。」といった記述から、スキルに応じた表現の設定や難易度の工夫が必要だったことがうかがえた。

加えて、「今度はもっと練習をして上手く言えるようになってから発表したい。」や「次回ではアイコンタクトをして発表出来ればいいと思います。」などの記述から、話す練習が少なく、相手の方を見ないで、原稿を読むだけにとどまってしまった生徒が多くいたことが分かる。練習時間をしっかり確保できるような活動時間の配分が課題として残った。また、発表するときの状況や場面を意識させ、できる限り相手を意識しながら工夫して発表することなど、より明確に指示する必要があった。

(4) グループ学習の有効性

1 時間目、2 時間目のグループ学習において、生徒たちは好意的な評価をしている。

1 時間目では、「班でノートとかを当てるのを英語でやったのは初めてだったので、すごく自分でもうれしかったです。」「4 人で“Is this ~?” “Is that ~?” で話せて楽しかったです。またみんなと話してみたいです。」「短時間で友達とコミュニケーションが出来て良かった。楽しかった。」などの記述があった。

2 時間目についても、「最初、発音がよく分からなかったけれど、みんなの発音を聞いていくうちに分かるようになって、自信を持ちました。」「みんなで文を考えられた。積極的に調べてくれる人がいて、スムーズに文を作れた。読み方など分からない人を支えられた。」「みんなで協力して文を考えて、いい文が作れた。」などの記述があった。

これらの記述から、短時間で友達とコミュニケーションができた楽しさを実感していることが読み取れ、意欲向上につながったと感じられる。また、みんなで協力してよりよい文が作れたり、他のメンバーなどを支えたりすることによって、書くことへの苦手意識を低くすることができたことが読み取れる。グループ学習で、学び合う機会を持てたことにより、助け合いができ、一人一人の自信につながったことがうかがえ、様々なスキルの生徒に有効だったことが考えられる。

7. まとめ

(1) 成果

本年度の実践を通じた成果として、以下の 5 点をあげる。

- ・生徒にとってリアリティのある場面設定や、ネイティブ・スピーカーである ALT を活用することによって、必然性のある活動ができた。
- ・自己との関わり、相手意識を高めることで、「伝えたい」「聞きたい」という生徒

の意欲を駆り立てることができ、動機づけにつながることを実感できた。

- ・限られたスキルでも、小学校との連続性を考慮し、ICTを活用したり、ゲーム的要素などを取り入れたりすることによって、学ぶ意欲が高まった。
- ・グループ学習を通じて、学び合い・助け合いができ、自信を持って活動に取り組めることにつながった。
- ・スキルが限られている中学校1年生でも工夫次第では、有効な自己表現活動を展開することが可能であることも明らかになった。

(2) 課題

今後の課題として、自己表現活動を実施するにあたって、留意点を2点あげる。

① 活動のバランスと時間の保障

授業時間が限られているので、活動を多く取り入れることは難しい。山梨県では学力把握調査の結果を受け、「平成24年度 授業改善プラン」(2012)が出され、その中に「学習に、言語材料について理解したり練習したりする活動と、互いの気持ちを伝え合う活動をバランスよく取り入れ、言語活動を通して言語材料を定着させる授業づくりを行う。」という記述がある。学習したことを生かした活動をバランスよく展開できるように留意していかなければならない。

② 自由度の制限や設定

自己表現活動は、自由度の設定が難しい。特に以下の3点到留意することが必要である。

1) 扱う文章量や使用表現の選定

特に中学校1年生の後期以降、スキルにばらつきが出てくる。また、学年が上がるにつれ、そのばらつきはさらに広がっていくことも考えられる。生徒の実態を考慮し、単元を通じて繰り返し言語材料を使用し、どの生徒も参加できるように工夫することが課題となってくる。

2) 正確な場面設定

今回、生徒は自由に活動したので、“this”と“that”の距離感が曖昧になってしまった。限られた環境の中で、正確な表現ができる場面設定や活動を考えなければならない。

3) 正確なフィードバック

自由度が増すと、生徒が文法を間違えてしまうことが懸念される。生徒が誤りのある表現をした際に、見逃さず、すぐにフィードバックしたり、ALTと連携してライティングの添削をするなど、正確にフィードバックしたりすることに留意する。

一方で、どの活動でも、工夫次第で自己表現活動に結び付けることができるということを実感した。今後は、どのような単元においても、1時間の授業の中で自己表現活動を実践できるように目指していきたい。

8. 参考文献・資料

- ・Benesse 教育研究開発センター，2009，「第1回中学校英語に関する基本調査[教員調査]」速報版
- ・Benesse 教育研究開発センター，2012，「小・中学校の英語教育に関する調査」速報版
- ・文部科学省，2008，『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』，東洋館出版社
- ・文部科学省，2008，『中学校学習指導要領解説 外国語編』，開隆堂
- ・文部科学省，2009，『英語ノート 1 指導資料』
- ・直山木綿子，2012，「中学校英語科の指導のあり方を考える～外国語活動導入を機に～」，講演資料
- ・新里眞男他 32名，2012，『SUNSHINE ENGLISH COURSE 1』，開隆堂
- ・田中武夫・田中知聡，2006，『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』，大修館書店
- ・山梨県教育委員会，2012，「平成24年度授業改善プラン 外国語」